子ども用

伝道地便り

2024年第４期　北アメリカ支部

第１話「並外れたお庭」　アリゾナ

第２話「幽霊が怖い」　アリゾナ

第３話「縁起の悪いきつね　アリゾナ

第４話「キャンプの一日」　アラスカ

第５話「いなくなった男の子」　アラスカ

第６話「アラスカでの大冒険」　アラスカ

ADVENTIST MISSION

セブンスデー・アドベンチスト教団　伝道局　安息日学校部

伝道地便りの用い方の ヒント

伝道地便りに収められているのは、現地からの一人ひとりの生きた経験です。安息日学校でこれを用いるときには、生き生きとご紹介していただきたいのです。そのためのヒントを、いくつか列挙いたします。

1）前もって何度か目を通し、自信を持って読む。

2）棒読みは避け、証されている大事な部分を明確にしておく。

3）伝える時間はできるだけ短く。長くても５～７分。

4）誰が、いつ、どこで、何を、なぜ、どうしたかが分かるようにする。

5）できたらカードに文字や絵を書くなどの視聴覚的工夫を。

6）時には、スキット（寸劇）風にしてくださっても良いですね。

伝道地便りは、私たちが自分の証をするときの練習になります。
主の愛の証のために、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして」
紹介しましょう。

1．並外れたお庭　アリゾナ

カストン

「並外れた」という言葉を知っていますか？

「並外れた」とは、普通ではないということです。「並外れた」ものは、とてもとても特別なものなのです。

アメリカのアリゾナ州に、ペイジという町があります。この町には並外れたお庭があります。庭なんかが並外れているわけはない、と思うかもしれません。けれども、この町の人々にとって、この庭は並外れているのです。

この町は乾燥した暑い砂漠の中にあるために、野菜や果物があまり育ちません。新鮮な野菜や果物が欲しい人たちは、遠くの、もっと雨が降って、暑くもない町まで車を走らせるしかありません。たとえ野菜や果物の苗を買ってきても、暑い太陽のせいで、しおれて枯れてしまうのでした。

そんな町に、牧師のジェームズ先生と、奥さんのナンシー先生がやって来ました。そして２人は、この町のセブンスデー・アドベンチスト教会に、大きな庭を作りました。

町の人たちはみんな、赤いトマトの苗はしおれて枯れてしまうと思っていました。緑色のズッキーニも、黄色いかぼちゃも、しなしなになって枯れてしまうと思っていました。りんごも桃もザクロも、枯れてしまうと思っていました。けれどもどの野菜や果物も枯れることなく、どんどん、どんどん、どんどん大きくなっていきました。

このお庭は普通じゃないね、とみんなは言いました。とてもとても特別な庭、並外れた庭だね、と言いました。

さて、この町に、カストンという３歳の男の子が、お母さんと一緒に住んでいます。カストンはずっと、おじいちゃん、おばあちゃんと暮らしていたのですが、最近お母さんと一緒にこの町に引っ越して来ました。そのため、カストンはお母さんのことをまだよく知りませんでしたし、お母さんもカストンのことをよく知りませんでした。２人とも、仲良くなりたいと思っていましたが、どうすればよいのかわかりませんでした。

お母さんはある日、セブンスデー・アドベンチスト教会の、並外れた庭のことを聞きました。そしてその庭で子どものための楽しいプログラムがあることを知りました。お母さんはカストンに、一緒に行きましょうと言いました。

「他の子も来ると思うわよ。お花や野菜についても教えてもらえるし」とお母さんは言いました。カストンは喜んで「やったあ！」と言いました。

そしてある火曜日、カストンとお母さんは、アドベンチスト教会の並外れた庭に行きました。他にも子どもが８人来て、一緒に、ナンシー先生に庭について教えてもらいました。

ナンシー先生は子どもたちに、庭に咲いているきれいな黄色いひまわりを見せてくれました。足元の長い根っこと、てっぺんにある大きな種も見せてくれました。

カストンは、ひまわりについて知ることができて、とても楽しいと思いました。種も食べさせてもらい、とても美味しいと思いました。カストンはお母さんと一緒にいられて、うれしいと思いま

した。お母さんはとても楽しい人でした！

それからは、カストンは毎週このお庭に行くのを楽しみにするようになりました。このお庭で育つ果物について学び、たまに食べさせてもらいました。その庭に住んでいる羊やニワトリについても学び、触ってみることもありました。そして植物や動物、子どもたちを創り、成長させてくださるすばらしい神様についても学びました。

並外れたお庭に通ううち、カストンとお母さんにも並外れたことが起こりました。２人はとても仲が良くなって、最後には親友のようになったのです。

このように、並外れたお庭で並外れたことが起こったのでした。このお庭は、暑く乾燥した砂漠の中で野菜や果物を育てただけではなく、小さな男の子とお母さんが並外れて仲良くなる助けをしてくれたのです。

2011 年の 13 回献金の一部は、アリゾナ州のペイジに、並外れた庭のあるセブンスデー・アドベンチストの教会を建てるために使われました。今期も、並外れたお友だちであるイエス様を人々に伝えるための 13 回献金をおささげくださることに感謝します。

〈お話のヒント〉

- アリゾナ州ペイジの場所を地図で示してください。
- この庭の仲間たちのリーダー、ナンシー・クロスビーは、セブンスデー・アドベンチスト教会のアリゾナ州、ユタ州、ネバダ州におけるネイティブアメリカンに対する伝道の指揮も取っています。夫のジェームズはペイジの町にあるアドベンチスト教会の牧師です。コロナによるロックダウンで教会を閉めて伝道ができなくなった時、２人は庭を造りました。意外にもそれが伝道の機会となったのでした。彼らは庭で実ったものを地元の人々に提供しました。人々は、こんな砂漠の町ではあまり作物は育たないだろうと思っていました。ロックダウンが解除されると、彼らは子どものための庭で過ごすプログラムを開始しました。現在、このアドベンチスト教会の庭はとても有名になっています。
- 今回のお話の写真をFacebookからダウンロードしてください。bit.ly/fb-mq
- 北アメリカ支部の情報「Mission Posts and Fast Facts」をダウンロードしましょう。bit.ly/nad-2024
- この伝道地便りは、セブンスデー・アドベンチスト教会の「I Will Go」伝道戦略の、以下の項目の具体例です。
  「聖霊に満たされた生活を送れるように、個人や家族を訓練する」（「霊的成長の目標」No.５）。
  詳細はウェブサイト IWillGo2020.org をご覧ください。

宣教メモ

- 1863年5月、ミシガン州バトルクリークでアドベンチストの会議が開かれ、現在のセブンスデー・アドベンチスト教会が設立されました。最初のアドベンチストの宣教師はＪ・Ｎ・アンドリュースで、1874年にイギリスとスイスに送られ、アドベンチスト教会のリーダーを援助しました。

2. 幽霊が怖い

アリゾナ

サラ

サラは、11歳のナバホ族の女の子です。彼女は幽霊が怖くてたまりませんでした。けれども、そのことをナンシー先生には言いませんでした。ナンシー先生は、アリゾナ州ペイジ町のセブンスデー・アドベンチスト教会の先生で、サラはそこで勉強を始めたところでした。サラは幽霊が怖いという気持ちを、9歳の妹のテイタムにだけは話しました。テイタムはその気持ちをわかってくれました。テイタムも幽霊が怖かったからです。

ある日、サラはナンシー先生に、夜になるとサラの部屋でおかしなことが起こることを打ち明けました。サラは詳しくは言いませんでしたが、ナンシー先生は、彼女がとても怖がっていることがわかりました。

ナンシー先生は言いました。「今度お家でそういう怖いことが起こったら、イエス様にお祈りしてね。イエス様が助けてくださいますよ」

それから先生は、お話しするために、サラを教会の2階にある小さな図書室に連れて行ってくれました。サラは床に座り、先生は本棚の近くの椅子に腰かけました。「幽霊というのは、悪い霊が、人を怖がらせようとしているだけですよ。でもイエス様は悪い霊よりも強くて、あなたを守ってくださるのよ」と先生は言いました。

サラは、先生の言うことをしっかり聞きました。「怖がらなくていいのよ。イエス様にお祈りすると、幽霊が部屋に来るといって怖がらなくてもよくなりますからね」

それから先生は、イエス様に助けてもらうために祈る方法を教えてくれました。「何が必要かをイエス様にお伝えするといいのよ。『イエス様、助けて！』と言うだけで、悪い霊は家から出て行ってしまいますからね」

サラは何も言いませんでした。けれども家に帰ると、妹のテイタムに、ナンシー先生が言ってくれたことを伝えました。「先生は、怖がらなくていいって言ってくれたのよ。もし何かが見えたら、イエス様にお祈りすればいいの」

テイタムは別の部屋に寝ていましたが、彼女の部屋でも夜におかしなことが起こっていました。サラはテイタムにお祈りのしかたを教えました。

何日か経った夜のこと、サラの寝ている部屋でまた、おかしなことが起こりました。サラは恐くなって、毛布をかぶって泣き出しました。テイタムはその泣き声を聞いて部屋に入ってきました。そしてサラの毛布の中にもぐりこみました。

その時、サラはナンシー先生がイエス様にお祈りするようにと話してくれたことを思い出しました。サラはお祈りすることにしました。「イエス様、助けてください」とサラは言いました。するとすぐに、気分がずっと良くなりました。部屋の中に平和が戻って来て、眠ることができました。テイタムは朝まで一緒にベッドの中にいました。妹が一緒にいてくれるのはとても良い気分でした。けれども、もっとすばらしいのは、イエス様が一緒

にいてくださることを知っていることでした。

その夜から、サラは幽霊を怖がらなくてもよいことを知りました。お祈りすると、イエス様が守ってくださるのです。イエス様はあの夜守ってくださいましたから、また守ってくださるでしょう。サラはお願いすればよいだけなのです。

2011 年の 13 回献金の一部は、サラが祈りの力を学んだアリゾナ州のペイジ町にあるセブンスデー・アドベンチスト教会を作るために使われました。今期の 13 回献金に感謝します。それにより、もっと多くの人々がイエス様について知ることができるでしょう。

〈お話のヒント〉

・アリゾナ州ペイジの場所を地図で示してください。
・この庭の仲間たちのリーダー、ナンシー・クロスビーは、セブンスデー・アドベンチスト教会のアリゾナ州、ユタ州、ネバダ州におけるネイティブアメリカンに対する伝道の指揮も取っています。サラは公立校で問題を抱えていて、ナンシーはサラの父親に頼まれて彼女に勉強を教えていました。ナンシーの夫のジェームズはペイジ町のアドベンチスト教会の牧師です。
・今回のお話の写真をFacebookからダウンロードしてください。bit.ly/fb-mq
・北アメリカ支部の情報「Mission Posts and Fast Facts」をダウンロードしましょう。bit.ly/nad-2024
・この伝道地便りは、セブンスデー・アドベンチスト教会の「I Will Go」伝道戦略の、以下の項目の具体例です。
「聖霊に満たされた生活を送れるように、個人や家族を訓練する」（「霊的成長の目標」No.５）
「子ども、青年の入信、定着、再定着、礼拝出席を増加させる」（「霊的成長の目標」No.6）
「青年が神を第一とし、聖書的な世界観を体現できるように支援する」（「霊的成長の目標」No.7）
詳細はウェブサイト IWillGo2020.org をご覧ください。

豆知識

• アメリカの国の動物はアメリカバイソンです。国樹は樫、国鳥はハゲワシ、国花はバラです。

3. 縁起の悪いきつね　アリゾナ

楽しくおしゃべりしている子どもたちを乗せたスクールバスが、アリゾナの道路を走っていました。バスの中では、7人のネイティブアメリカンの男の子たちが、ホワイトマウンテンでの楽しいスキー遠足について、熱心に話していました。みんなは疲れてはいましたが、満足したリラックス気分で、自分たちの住んでいるホルブルック・セブンスデー・アドベンチスト・インディアン学校に戻るところでした。

急に、小さな茶色いきつねが道を横切っていきました。7人は全員息を飲み、声をそろえて「うわーーーーっ！」と言いました。バスを運転していたアリソン先生は、子どもたちの様子には気づかず、「あら、きつねがいるわよ！」とうれしそうに言いました。アリソン先生はキツネが大好きでしたし、このきつねは特にきれいだったからです。

けれども男の子たちはおびえていました。顔は真っ青で、真剣な表情になりました。おしゃべりもやめてしまいました。アリソン先生もみんなが静かになってしまったことに気づきました。そして、彼らがきつねを見ても喜ばないことにびっくりしました。男の子というのは、きつねが好きではないのでしょうか？「みんなどうしたの？」と彼女は尋ねました。

男の子たちは長いこと顔を見合わせていました。それから1人が、「僕たちの住んでいる所では、あれは縁起が悪いと言われているんですよ」と静かに言いました。「縁起って？」とアリソン先生は尋ねました。先生はネイティブアメリカンではないので、どういう意味かわからなかったのです。「それは話せないんです」とその男の子は答えました。「大丈夫よ、教えてちょうだい」先生は言いました。

男の子たちはまた顔を見合わせました。そしてその中の1人が、ネイティブアメリカンは太陽が沈むころに小さなきつねが道を横切るのは縁起が悪いと考えていることを説明してくれました。「それは、家族のだれかに何か悪いことが起こるという意味なんです」と彼は言いました。「何ですって？」アリソン先生はびっくりしました。「つまり、家族の誰かが多分病気になって死んでしまうんです。交通事故かもしれません。どうやってかはわかりませんが、とにかく誰かが来月亡くなるんです」

アリソン先生は車を脇に寄せて停めました。そして男の子たちに、勇気を出して自分たちの恐れていることを話してくれたこと、またネイティブアメリカンの文化についても教えてくれたことをありがとうと言いました。それから、先生も話したいことがあると言いました。「きつねは私にとって、こんな意味があります。このきつねは私たちのために神様が造ってくださった美しい生き物です。道を横切ったからといって家族に悪いことを起こすような力はないのですよ」。そして先生は男の子たちに、神様と一緒にいれば何も怖がる必

要はないことを知ってほしいと伝えました。「だからきつねと私たちのためにお祈りしますね」と先生は言いました。

先生は頭をたれてお祈りしました。「大好きな神様、きつねが無事にお家に帰れるようにしてください。私たちも無事に帰れますように。みんなの家族もお守りください。そして、みんながあなたのことを知ることができますように」。男の子たちは、先生がお祈りしてくれたことにびっくりしました。そのお祈りを聞いてイヤそうな顔をした人もいましたが、アリソン先生は気にしませんでした。男の子たちがこのお祈りを気に入らなくても良かったのです。一緒に楽しくスキーをした日の終わりに、彼らに神様の力を知ってほしいと先生は思っていました。学校に着くまで、男の子たちは黙って座っていました。おしゃべりをしたい人はもう誰もいませんでした。アリソン先生はクリスチャン・ミュージックをかけました。

ひと月が過ぎました。一緒にスキーに行った男の子がアリソン先生のところにやって来ました。そして、きつねを見てから1か月が過ぎたけれど、自分の家族にも友だちの家族にも、亡くなった人はいないと言いました。「あのね先生、僕たちそのことについて話していたんですけど、そしたら、先生がお祈りしてから、家族には何も起こっていないってことに気づいたんです」。アリソン先生はとても喜びました！　神様がお祈りを聞いてくださっただけではなく、男の子たちが神様に信頼するようになりつつあることがわかったからです。

ホルブルック・セブンスデー・アドベンチスト・インディアン学校の子どもたちのためにお祈りください。13回献金は長年に渡って、この学校での伝道活動を支えてきました。最近2回の北アメリカ支部のための13回献金では、学校のキャンパスに新しい学生センターを建てるために使われました。今期も献金をささげてくださることに感謝します。

豆知識

- アリゾナ州の州花はサグアロサボテンの花です。州の鳥はサボテンミソサザイです。

〈お話のヒント〉

- アリゾナ州ホルブルックの場所を地図で示してください。
- 今回のお話の写真をFacebookからダウンロードしてください。bit.ly/fb-mq
- 北アメリカ支部の情報「Mission Posts and Fast Facts」をダウンロードしましょう。bit.ly/nad-2024
- この伝道地便りは、セブンスデー・アドベンチスト教会の「I Will Go」伝道戦略の、以下の項目の具体例です。

「大都市における、神を知らない、もしくは神を受け入れていない人々や他宗教の人々へのアドベンチストの働きかけを強化し、多様化させる」（「伝道の目標」No.2）

「聖霊に満たされた生活を送れるように、個人や家族を訓練する」（「霊的成長の目標」No.5）

「子ども、青年の入信、定着、再定着、礼拝出席を増加させる」（「霊的成長の目標」No.6）

「青年が神を第一とし、聖書的な世界観を体現できるように支援する」（「霊的成長の目標」No.7）

詳細はウェブサイト IWillGo2020.org をご覧ください。

4. キャンプの一日

アラスカ

キングストン

キングストンにとって、サマーキャンプに行くことは大きな冒険でした。

キングストンは、トギアックというアラスカの村に住む、アラスカ生まれの男の子です。キャンプ・ポラリスに行ったとき、彼はまず飛行機で30分ほど離れたディリングハムという町に行きました。それから車に30分乗って、アレクナギクという湖に行きました。そこからモーターボートに乗って、ジャックナイフ山にあるサマーキャンプの行われる場所にやっと着くことができました。

キャンプ・ポラリスには1人で行ったのではありません。10人ほどの子どもたちが同じ村から一緒に行きました。キングストンも他の子たちも、神様についてはあまりよく知りませんでした。みんなは、同じトギアック村のジョセフィンというセブンスデー・アドベンチストの優しい女の人に誘われたのです。

キングストンはそのキャンプで神様についてたくさんのお話を聞きました。毎日、朝ごはんの前に、聖書を読んでお祈りする自由時間がありました。朝昼晩の食事の前には、順番で、神様に感謝をささげました。毎朝毎晩、中央ロッジでのお礼拝で、神様についてのお話を聞きました。そして、寝る前には、キャビンの中での礼拝で、カウンセラーに神様のお話をしてもらいました。キングストンは、大人たちが神様について話すのを聞きました。他の子どもたちが神様について話すのも聞きました。彼はあまり話しませんでしたが、聞いたことは全部心の中に入れました。

キャンプで子どもたちは、毎日グループに分かれて楽しい活動に参加しました。ある日、キングストンはサバイバルを学んでいるグループに加わりました。アラスカはとても広く、大自然が多く残っています。ですからサバイバルの方法を学ぶのはとても大切なのです。スタッフのサム先生が焚火のおこし方を教えてくれるのをキングストンは聞いていました。他の子どもたちは火おこしを見てお手伝いをしましたが、キングストンは少し退屈でした。焚火の仕方は6歳のときにもう習っていたからです。

サム先生はその焚火で料理はしませんでした。火がパチパチと燃えているとき、キングストンは家族とハンバーガーやホットドッグや野生の動物の肉を焼いたことを思い出していました。その時、茶色い地リスがいるのが見えました。地リスは他のリスと見た目は同じですが、木ではなく地面にできた穴の中に住んでいるのです。キングストンは地リスが穴から穴へと走り回るのを見ていました。

他の人もそのリスに気が付いて、「わあ、かわいい！」と言いました。キングストンは驚きました。そしてゆっくり首を振り、「かわいいんじゃないよ、美味しいんだよ」とまじめな顔で言いました。けれどもそのキャンプには地リスを食べ

ようとする人はいませんでした。キングストンはがっかりしましたが、それを顔には出しませんでした。彼は他の子どもたちと楽しくベイクドポテトやうずら豆、マカロニチーズやガーリックブレッドを食べました。

その後で、彼は自分の受け持ちの仕事を素早く終わらせ、浜辺でリラックスする時間を持ちました。平らな石を拾って、水切りをしました。石は1回、2回、3回、4回、5回跳ねて、ポチャン！と水の中に落ちました。キングストンが水切りをしているのを見て、他の子どもたちやってきました。1回、2回、ポチャン！　キングストンほどうまく石を跳ねさせることのできる子はいませんでした。石を投げていると、次の活動が始まるよと言われました。今度は泳ぐ時間です。「やった！」と歓声を上げた子どもたちがいました。キングストンは何も言いませんでした。彼はどんなことも受け入れました。

キャンプ・ポラリスはたったの1週間で終わり、キングストンはすぐに家に帰りました。たくさん考えることがありました。神様に従うことについても、彼は考えるのでした。

キャンプ・ポラリスに行くすべての子どもたちが神様に従う決心ができるようにお祈りください。以前の13回献金の一部は、キャンプ・ポラリスの改善のために使われました。今期も12月28日の13回献金をささげることによって、アラスカの子どもたちを助けることができます。

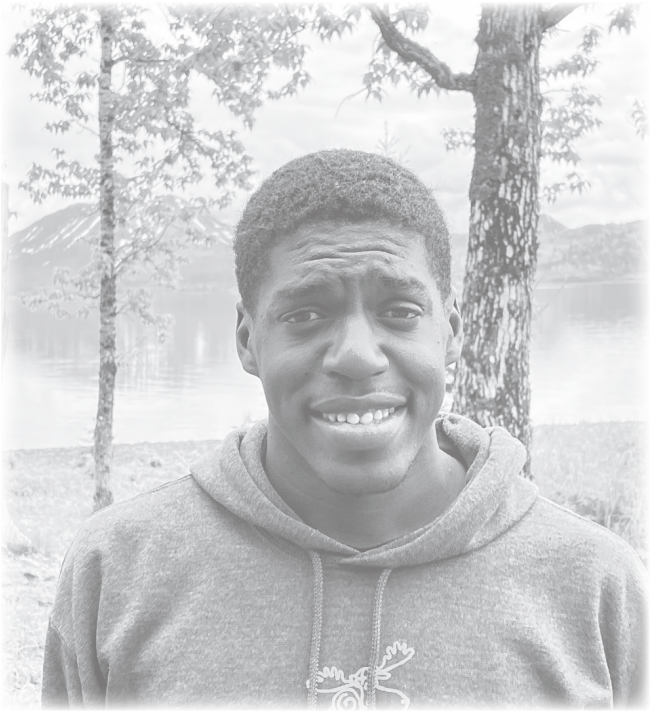
〈お話のヒント〉

- アリゾナ州トギアックとディリングハムの場所を地図で示してください。キャンプ・ポラリスは、ディリングハム郊外で行われています。また、今期の13回献金で感化センターが建てられるベテルの場所も示してください。
- キングストンが湖で水切りをする短い動画を見てください。bit.ly/NAD-Kingston
- 今回のお話の写真をFacebookからダウンロードしてください。bit.ly/fb-mq
- 北アメリカ支部の情報「Mission Posts and Fast Facts」をダウンロードしましょう。bit.ly/nad-2024
- この伝道地便りは、セブンスデー・アドベンチスト教会の「I Will Go」伝道戦略の、以下の項目の具体例です。
  「聖霊に満たされた生活を送れるように、個人や家族を訓練する」（「霊的成長の目標」No.5）
  「子ども、青年の入信、定着、再定着、礼拝出席を増加させる」（「霊的成長の目標」No.6）
  「青年が神を第一とし、聖書的な世界観を体現できるように支援する」（「霊的成長の目標」No.7）
  詳細はウェブサイト IWillGo2020.org をご覧ください。

豆知識

- アメリカ合衆国で最も多くの観光客が訪れる場所は、ニューヨークのエンパイアステートビル、ワシントンDCのリンカーン記念堂、カリフォルニア州サンフランシスコのゴールデンゲートブリッジです。

5. いなくなった男の子　アラスカ



アディーブ

これは、キャンプで男の子を見失ってしまったカウンセラーのお話です。

アラスカで行われたセブンスデー・アドベンチストのサマーキャンプで、7歳のリアムはそこらじゅうを走り回っていました。夜に彼を寝かせるのは一苦労でした。また、昼間どこにいるかを見失わないでいるのも一苦労でした。キャンプ期間が半分過ぎた頃、リアムはとうとう逃げ出してしまいました。

そもそもの始まりは、担当カウンセラーのアディーブがリアムに、勝手にどこかに行ってはいけないと注意したことでした。「ここで何してるの？」アディーブはいなくなったリアムを見つけて言いました。「居場所がカウンセラーにわかっているようにしないといけないよ。わからないと困ったことになるからね」。アディーブがまだ話しているのに、リアムはどこかに走って行ってしまいました。アディーブと他のスタッフはリアムを一生懸命探しましたが、見つけることはできませんでした。

アディーブはお祈りしました。しかし、リアムは見つかりません。アディーブはキャンプの責任者のところに行きました。そして、「担当している子が見つかりません。どこにいるのか全然わからないんです」と言いました。45分ほどすると、リアムはあらわれました。ニコニコしながら茂みから出てきたのです。アディーブは笑いませんでした。そして、「こんなことをしたらいけないよ」とリアムに言いました。「なんで？」とリアムは言いました。「いなくなったらいけないんだよ。それはダメなことなんだよ」とアディーブは言いました。

リアムはニコニコするのをやめました。注意されるのが嫌だったからです。そしてアディーブがまだ話しているのに、また走って行ってしまいました。けれども今度は、アディーブは彼がどこに行ったのかわかっていました。もう1人のカウンセラーのジェイコブと、茂みの中に入っていき、慌てて木を登っていくリアムを見たのです。ジェイコブは木の下から声をかけました。「降りてきてほしいな。お話ししよう」。リアムは木の上から下を見ていました。そして、「アディーブ嫌い。死んじゃえ！」と言いました。その言葉にアディーブの心は傷つきましたが、神様の愛をリアムに伝えようと決めました。

「僕は君が好きだよ」と木に向かって言いました。「知るもんか。ぼくはあんたが大嫌い」とリアムは答えました。「それでもいいよ。僕は好きだからね。けがをしてほしくないんだよ。下りてきてくれないかな」とアディーブは言いました。ジェイコブも、下りてきてほしいと言いました。でもリアムは言うことを聞きませんでした。そして、「別にいいよ、けがしたって、死んだって」と言いました。

アディーブはそれを聞いてとても悲しくなりま

した。リアムが自分の家でつらい思いをしているかもしれないと気づいたからです。彼はまだ7歳なのに、もう何も気にしないようになっていたのです。アディーブはもう一度、下りてきてと言いましたが、リアムは動きませんでした。アディーブとジェイコブはそこで長い時間待っていました。ついに、リアムはゆっくりと木から下りてきました。

リアムが下に着くと、アディーブは彼にその日はずっと一緒にいないといけないと言いました。リアムがアディーブの信頼を失ってしまったことを分かってほしいと思ったのです。それに、またいなくなってほしくありませんでした。

その夜、礼拝の前に、アディーブはリアムと心から話し合いました。「大嫌いと言われた時は悲しかったよ。そのことは言っておこうと思ってね。君に嫌な思いをさせたいのではなくて、君の言葉に僕が傷ついたことを知ってほしいから、こうやってお話ししているよ。僕が何を言いたいかわかるかい？」リアムは下を向きました。そして「わかる」と静かに言いました。

「僕の仕事は、君がキリストを知って、無事に守られているようにすることなんだ。僕のことを好きでなくてもいいんだよ」とアディーブは言いました。残りの日々は、うまくいきました。リアムは多くの時間をアディーブのそばで過ごしました。アディーブがランチを食べているときも、焚火で温まっているときも、リアムは近くにいました。アディーブはリアムがこれからどうなるのかはわかりません。彼はキャンプでリアムを見失いましたが、リアムにはキャンプを通してイエス様を見つけてほしいと願っています。

セブンスデー・アドベンチスト教会は、毎年アラスカで８つのサマーキャンプを運営しています。そのうちの一つ、ディリングハム郊外のキャンプ・ポラリスでは、2015年の13回献金の一部で、新しいキャビン、きちんとしたトイレとシャワーが作られました。今期の13回献金の一部は、アラスカのベテルで神様の愛を伝えるために使われます。

〈お話のヒント〉

- アリゾナ州トギアックとディリングハムの場所を地図で示してください。また、今期の13回献金で感化センターが建てられるベテルの場所も示してください。
- リアムは仮名です。
- 今回のお話の写真をFacebookからダウンロードしてください。bit.ly/fb-mq
- 北アメリカ支部の情報「Mission Posts and Fast Facts」をダウンロードしましょう。bit.ly/nad-2024

- この伝道地便りは、セブンスデー・アドベンチスト教会の「I Will Go」伝道戦略の、以下の項目の具体例です。
  「聖霊に満たされた生活を送れるように、個人や家族を訓練する」（「霊的成長の目標」No.５）
  「若者、ヤングアダルトが神を第一とし、聖書的な世界観を体現できるように支援する」（「霊的成長の目標」No.7）
  詳細はウェブサイトIWillGo2020.orgをご覧ください。

豆知識

- アメリカ合衆国の高い山トップ20のうち1から17位までがアラスカにあります。北アメリカ最高峰のデナリ（以前のマッキンリー）は、海抜約6190ｍです。デナリというのはこの山の峰に付けられた名前で、アラスカ原住民の言葉で「大きな山」という意味です。

6. アラスカでの大冒険

アラスカ

マトローナ

マトローナは、安息日に計画している大きな冒険を前にワクワクしていました。子どものための安息日プログラムを手伝うために、自分の住んでいるアラスカのベテルから、船に乗ってアラスカ原住民の村に行くのです。特別に楽しい安息日になるわ！と彼女は思いました。マトローナがお母さんと４人のお友だちと一緒にベテルのセブンスデー・アドベンチスト教会からモーターボートに乗ったとき、雨が降っていました。朝の９時に教会を出たみんなは、３時間後にはユーコン川とカスコクウィム川の三角州にある村に着く予定でした。

けれども、予定通りにはいきませんでした。出発からたった 30 分で、ボートは広い川の真ん中にある、砂の盛り上がった中州に乗り上げてしまいました。マトローナもみんなも、ボートを動かそうと色々なことをしました。ボートから降りて中州からボートを水の中に押し戻そうとしました。けれどもボートは動きません。今度はボートを引っ張ろうとしました。それでもボートは動きません。次にボートに乗って、前後にゆらして川の中に戻そうとしました。やはりボートは動きません。小さな島に乗り上げてしまって、そこから動けなくなってしまったのです。

１時間が過ぎました。マトローナとみんなは讃美歌を歌いました。大きな川の中にいたので、周りには誰もいません。そこで精一杯の声を上げて「御手の中で」や「Over the Sea（海を越えて）」などの讃美歌を歌いました。歌うことに疲れると、マトローナはお母さんのスマホで自撮りをしたり、ボートや周りの風景の写真を撮ったりしました。

２時間が過ぎました。マトローナはお腹が空きました。そこで、用意してきたサンドイッチをみんなで食べました。ひよこ豆と玉ねぎでツナのような具を作り、それを全粒粉のパンにはさんだ美味しいサンドイッチです。デザートにはヤナギランで作ったピンク色のジャムをパンに塗ったものを食べました。ヤナギランというピンク色の花で作ったジャムは、変わった味がします。甘くて酸っぱくて、花のような果物のような香りがします。そしてイチゴとアプリコットを混ぜたような味がするのです。

お昼を食べると、マトローナは少し気持ちがくじけてきました。みんなは、アラスカ原住民の役場から、村の集会所で子どものプログラムを持つための特別な許可をもらっていました。この許可をもらうのにはとても時間がかかり、大変だったのですが、今、彼らはこうして中州に乗り上げ、動けなくなってしまっているのです。

「あんなに頑張ったのに、動けなくなっちゃったね」とマトローナはお母さんに言いました。お母さんはスマホを出して、今回の訪問を計画してくれた村の女性に電話しました。「中州に乗り上げてしまったんですよ」とお母さんは言いました。「それは大変ですね」と女性は言いました。そして、時間通りに来られなくても、５時までに到着したら子どものプログラムをしても良いと言って

くれました。それを過ぎると、子どもたちは他にやることがあるので忙しくなってしまうとのことでした。

その頃にはもう、ベテルを出てから３時間が経っていました。潮が満ちてきて、水の量が段々増えてきました。すると、ボートは不意に中州から離れました。また動けるようになったのです！マトローナは大人たちがどうしようかと話し合っているのを聞いていました。村に行くまではあと２時間かかります。行くだけの価値があるのだろうかとマトローナは考えました。大人たちは、行ってみようと言いました。

「どうなるかやってみましょう。やるだけの価値があるわ」と大人の一人が言いました。ボートは５時ぴったりに村に着きました。マトローナとみんなは子どもプログラムの準備をするために集会所に入りました。それから村のスピーカーを使って、子どもたちにプログラムがあることを知らせました。

「お知らせしていたプログラムを始めます。遅くなってしまってごめんなさい。１時間のプログラムなので、ぜひ来てください！」とお母さんはスピーカーを通して言いました。

50 人以上の子どもたちが集まってきて、集会所はいっぱいになりました。

マトローナと他のスタッフは子どもたちの前で自己紹介をしました。それからみんなでイエス様についての楽しい讃美歌を歌いました。マトローナはプロジェクターを操作して、子どもたちが歌詞を見て一緒に歌えるようにしました。それから、お母さんがイエス様についての短いお話をして、子どもたちは粘土と人形で楽しい工作をしました。最後に、マトローナはおやつを配るのを手伝いました。子どもたちは果物を食べることができてとても喜びました。赤いりんご、緑のキウイ、黄色い桃、オレンジ色のオレンジ、紫色のぶどうがありました。この村の近くでは果物が育たないので、それらは特別なごちそうでした。

子どもプログラムが終わると、マトローナはまたボートに乗り込みました。疲れましたがとても幸せな気分でした。今回の安息日は大冒険になりましたが、早くも次の機会が待ちきれません。

マトローナとお母さん

マトローナのお母さんと他の人たちがボートを押しているところ

アラスカ原住民の村での子どもプログラムで男の子が工作をしているところ

アラスカの原住民の村でマトローナがポーズをとっているところ

今期の 13 回献金の一部は、アラスカのベテルにあるマトローナの教会が神様の愛を伝えるために使われます。みなさんの献金は北アメリカ支部のその他の２つのプロジェクトも助けてくれます。ミズーリのセントルイスと、メリーランドのボルティモアでのプロジェクトです。みなさんの献金に感謝します。

〈お話のヒント〉

・アラスカ州ベテルの場所を地図で示してください。
・最初にある写真は、マトローナがボートで動けなくなっていたときに撮ったものです。
・今回のお話の写真をFacebookからダウンロードしてください。bit.ly/fb-mq
・北アメリカ支部の情報「Mission Posts and Fast Facts」をダウンロードしましょう。bit.ly/nad-2024

・この伝道地便りは、セブンスデー・アドベンチスト教会の 「I Will Go」伝道戦略の、以下の項目の具体例です。
「聖霊に満たされた生活を送れるように、個人や家族を訓練する」（「霊的成長の目標」No.５）
「子ども、青年の入信、定着、再定着、礼拝出席を増加させる」（「霊的成長の目標」No.6）
「青年が神を第一とし、聖書的な世界観を体現できるように支援する」（「霊的成長の目標」No.7）
詳細はウェブサイト IWillGo2020.org をご覧ください。